

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

第11回 全国大会プログラム

日時： 2011年11月19日(土) 10:00～17:50
場所： 甲南大学 岡本キャンパス
〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1
TEL：078-431-4341
(JR 摂津本山駅・阪急岡本駅 徒歩10分)

(5号館511号教室)

- ★総合司会 日本大学教授 原 公章
★会長挨拶 (10:00～10:05) 南山大学名誉教授 荻野昌利
★研究発表 (10:10～11:40)
第一室 (5号館521教室)

- 司会 関西外国語大学専任講師 橋野朋子
1. *East Lynne* における女性と道徳 広島工業大学講師 山内香澄
2. ワシントン・アーヴィング『マホメットとその後継者たち』に見るイスラーム表象
常磐大学准教授 外山健二
司会 中央大学教授 大田美和
静岡産業大学准教授 岡谷慶子

3. マリ・バシュキルツェフの妹たち
第二室 (5号館522教室)

- 司会 武庫川女子大学教授 玉井 暉
1. J. M. W. Turner の *Juliet and Her Nurse* にみるヴェニス 聖心女子大学特別研究員 高橋明日香
2. 次世代の文学へ向けて——アーサー・シモンズと『サヴォイ』
ロンドン大学 King's College 大学院 庄子ひとみ
司会 京都大学准教授 小関 隆
近畿大学講師 堀内真由美

3. ジーン・リース再考——クリオール女性史の観点から
(5号館524-2教室)

- ★理事会 (11:50～12:50) 司会 東京女子大学教授 原 英一
(5号館511号教室)
★会場校挨拶 (13:00～13:05) 甲南大学学長 高阪 薫
★総会 (13:10～13:40) 司会 福島大学教授 辻 みどり

★シンポジウム (14:00～16:30)

ヴィクトリア時代の人々はいかに幸福であったか

- 司会・パネリスト 神戸大学経済学研究科教授 重富公生
パネリスト 岡山大学社会文化科学研究科教授 小田川大典
パネリスト 東京大学経済学研究科教授 小野塚知二
司会・パネリスト 横浜国立大学国際社会科学研究所教授 有江大介
司会 日本大学教授 原 公章

★特別講演 (16:40～17:40)

《文化》とはなにか？——イギリスにおける《文化》の生成と発展の歴史

- 南山大学名誉教授 荻野昌利
★閉会の挨拶 (17:40～17:50) 甲南大学教授 井野瀬久美恵
★懇親会 (18:00～20:00) 会場 カフェ・パンセ 司会 兵庫教育大学教授 大嶋 浩

【研究発表】

East Lynne における女性と道徳

広島工業大学講師 山内香澄

Sensation novel は、1860年代以降にヴィクトリア朝の出版界に隆盛し、しかしその後次第に衰退した大衆小説の一ジャンルである。1860年1月に *New Monthly* で連載が始まり、1898年までに430万部を売り上げるベストセラーとなった Ellen Wood (1814-1887) の *East Lynne* は、そのジャンルの先駆的存在として知られている。この作品に登場する Lady Isabel の、家庭と社会において自らに与えられた役割にもがく姿は、同じように「家庭の天使」としての役割を与えられた中産階級の女性読者の共感を誘った。Showalter は、このジャンルの人気の特異性について、女性が強いられた「家庭の天使」の役割と関係があることを指摘している。

本発表は、Ellen Wood が19世紀の女性に家庭の天使の道徳を踏まえて、読者に語りかけると同時に、当時の女性が置かれている立場の閉塞性を明らかにする。この作品が妻、母という当時の女性の読書趣向に、批判と共感の曖昧性をもって、結びついていることを示したい。

ワシントン・アーヴィング『マホメットとその後継者たち』に見るイスラーム表象

常磐大学准教授 外山健二

ワシントン・アーヴィングが『スケッチ・ブック』や「スリーピー・ホローの伝説」の作家として知られていることは周知の事実である。だが、彼の作品『マホメットとその後継者たち』(1849-50) はどの程度知られているのだろうか。

本発表では、まず、この作品がヴィクトリア朝イギリスの時代観を大きく反映していることを示したい。たとえばナポレオンがエジプト遠征から持ち帰ったさまざまな資料を集成した『エジプト誌』の刊行がフランスで進められていた時期に、東方世界に関心が高まり、エドワード・レインは『当世エジプト人の風俗と慣習』を刊行した。それをアーヴィングは参照して『マホメットとその後継者たち』を書いたことなどである。

さらに、そのような事実を踏まえ、この作品とヴィクトリア朝がどのように結ばれているのかという問いを、イスラーム表象を視座に解明したい。

マリ・バシュキルツェフの妹たち

静岡産業大学准教授 岡谷慶子

マリ・バシュキルツェフはウクライナ生まれの貴族の娘で、パリのアカデミー・ジュリアンに学び美術史に名を残し、結核で夭折した天才少女芸術家として神話化され、芸術家志望の少女たちのアイドルとなり、その日記は公刊され彼女たちのバイブルのように読まれた。1889年に英訳されその後邦訳もされ『世界名作大観』に収録され、野上弥生子の『真知子』や宮本百合子にその影響をみてとれる。『足ながおじさん』はヴァッサー女子大に取材しているが、その授業でも「日記」が使用されている。マンスフィールドは若き日にバシュキルツェフに傾倒した。『エミリーの求めるもの』の作家モンゴメリも「日記」を読んでいた。先行研究では画家としての業績がとりあげられ、フェミニズムの観点から女性芸術家にとっての時代的な困難の克服が論じられているが、本発表では主として世紀転換期の英語圏でマリの日記が女性作家の自己形成のモデルとして機能したかを検証したい。

J. M. W. Turner の *Juliet and Her Nurse* にみるヴェニス

聖心女子大学特別研究員 高橋明日香

1836年ロイヤルアカデミーに出展されたJ. M. W. ターナーの『ジュリエットと乳母』は厳しい批判を招いた。主な指摘は、本来はヴェローナで繰り広げられるシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を、ヴェニスのサンマルコ広場を舞台に描いたことである。従来の研究は断片的な理由づけにとどまっているのに対し本発表では、ターナーのヴェニス像を様々な角度から明らかにし、そこにシェイクスピアとの融合の理由を見出す。

絵画に描かれたヴェニスは3つの要素の融合と考えられる。スケッチブックに記録された地誌的ヴェニス、旅行記やそれをもとにした文学作品に描かれたヴェニス、そしてシェイクスピアをはじめ、実際に訪れたことのない作家の描く架空のヴェニスである。この多層性を明らかにするなかで、ターナーの翻案の姿勢が浮かび上がってくる。時には有機的つながりのない様々な要素を融合させることであらゆる解釈が開かれ、『ジュリエットと乳母』においてはヴェニスとシェイクスピアの融合も可能になる。

次世代の文学へ向けて——アーサー・シモンズと『サヴォイ』

ロンドン大学 King's College 大学院 庄子ひとみ

アーサー・シモンズ (Arthur Symons: 1865-1945) の文学的貢献を語る際、詩人、文芸批評家としての側面が注目される機会は多くとも、雑誌『サヴォイ』 (*The Savoy*: Jan-Dec, 1896) の仕事は軽視されがちである。『イエロー・ブック』 (*The Yellow Book*: 1894-1897) が窮地に追い込まれていた当時、これを好機と判断したスミザーズ (Leonard Smithers: 1861-1907) の呼びかけで新しい雑誌『サヴォイ』の文芸編集を任されたものの、短期で迎えた廃刊に「商業的失敗」の印象は否めない。しかし、シモンズの掲げた編集方針ゆえに国際的かつ革新的な誌面になりえたことも事実であろう。『象徴主義の文学運動』 (*The Symbolist Movement in Literature*: 1899; 1919) の出版を含め、シモンズが次世代への文学的仲介者として活躍する前段階として注目すべき『サヴォイ』の仕事について再考したい。

ジーン・リース再考——クリオール女性史の観点から

近畿大学講師 堀内真由美

ジーン・リース (Jean Rhys, 1890-1979) は、1966年に76歳で発表した *Wide Sargasso Sea* (『広い藻の海』) で、イギリスのみならず欧米諸国から高い評価を受けた。80年代以降は、ポスト・コロニアリズムの影響から、ふたたび文芸批評の対象として注目を集める。白人クリオール女性としての自己認識や、周囲の非白人女性への姿勢、「本国」イギリスとイギリス人への感情などが、彼女の個人史と密接に重ね合わされて描かれていることから、ポスト・コロニアル作家として、盛んに論評されるようになったのである。

本報告では、故郷、英領西インド植民地ドミニカ島を10代で離れてから40代半ばまで、リースが保持しようとした「西インド人」としての自己認識を中心に考察する。とりわけ、これまで言及されてこなかった「自己認識の動揺」の要因を、ヴィクトリア朝の遺産である植民地支配が、現地生まれのクリオール女性に与えた影響の一つとして提示したい。

【シンポジウム】

ヴィクトリア時代の人々はいかに幸福であったか

「1851年ロンドン万国博覧会と労働者」

神戸大学大学院教授 重富公生

「自分語りの幸福：ロマン派以後」

岡山大学大学院教授 小田川大典

「ヴィクトリア時代の身体的幸福：食と音楽」

東京大学大学院教授 小野塚知二

「ヴィクトリア時代の金銭と幸福：幸せはカネで買えるか」

横浜国立大学大学院教授 有江大介

しばしば指摘されているように、ヴィクトリア時代のイギリスは、社会の各階層が「世界の工場」下でそれなりの物質的豊かさにあずかることができた時代であると同時に、人間にとってなにが幸福であるかの尺度や遠近法も、著しく多様化し変化していった時期でもあった。このシンポジウムは、それぞれ視角が異なる四つの報告を提供することにより、ヴィクトリア時代の「幸福」の諸相を再検討することを目的としたものである。それにより現代社会の原型が形作られたとされるこの時代の、消費生活や幸福をめぐる心性を浮き彫りにしたいと考えている。

重富報告は、1851年に開催されたロンドン万博を労働者たちがどのように受容し、それが彼らにとっていかなる「福音」を意味したのかを探ってゆく。小田川報告は、ヴィクトリア時代の自伝の人氣を背景に、自伝を語ることの幸福感を取り上げる。小野塚報告は、一般的に食文化が「衰退」し、名だたる作曲家を輩出しなくなったとされている19世紀イギリスにおいて、「身体的幸福」はどのように捉えられていたのかを論じる。そして有江報告は、「拝金主義」的時代風潮の傍らに見え隠れする人々の本音と建前をも考慮しつつ、彼らの金銭観・幸福感を追求する。

【特別講演】

《文化》とはなにか？——イギリスにおける《文化》の生成と発展の歴史

南山大学名誉教授 荻野昌利

George Steiner は *In Bluebeard's Castle: Some Notes Towards the Redefinition of Culture* (1971) という記念すべき講演の中で、T. S. Eliot の *Notes towards the Definition of Culture* (1948) を俎上に乗せ、西洋の《文化》の概念が今日 Eliot の言うようにキリスト教的土台から再構築することはもはや不可能であって、『青髭の城』ように最終的には消滅の奈落に落ちようとしていると説いた。要するに20世紀も後半に至り《文化》の概念は果てしなく膨張を続けた挙句に星雲のごとく爆発の運命の危機に瀕しているという絶望的認識がそこにはある。ではこのように《文化》が肥大化して収拾がつかなくなるまで膨張した原因はどこにあるのか、その原因は明らかに19世紀中期“culture”が《教養》から《文化》へと概念的に大きく変容を遂げた時代にまで遡れるのではないか。Matthew Arnold が機会あるごとに《文化》の必要性を説いたとき、彼は《教養》の延長として《文化》の存在を思い描いていたはずである。しかし彼の意識はすでに《教養》の概念では収まりきれない厄介な《文化》という怪物の姿をそこに垣間見ていたのではなかろうか。実際に19世紀末にはいわゆる“pop culture”と言うような新しい文化概念が登場して来るようになり、《教養》は次第に背後に押しやられるようになる。このようなめまぐるしい変化の起きた19世紀の後半の時代にまず焦点を当てて“culture”の言葉の概念的变化が生じた過程をできる限り詳しく点検し、そこに今日の《文化》の概念の無秩序な混乱の胚種となるものを見いださそうと思う。

日本ヴィクトリア朝文化研究会
(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：〒156-8550

東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

Tel/Fax: 03-5317-9709/9336

E-mail: victoria@chs.nihon-u.ac.jp